

協働研究会 Part.

BSOのフレームチャート

第3回 整理する技法とフレームチャート作成のポイント

前号のフレームチャートの技術（協働通信 No.28 号）では、フレームチャートにはどのようなタイプがあるのかを紹介しながら、言いたいことや伝えたいことをどうやってチャート化すればよいのかを解説していきました。

フレームチャートについての理解をさらに深めていただくために、毎回少し違った切り口からフレームチャート作成にあたってのポイントを解説していきたいと思います。

1. フレームチャート創りの準備

役に立つフレームチャートを創るためには、次の準備が必要である。

1) 調べる（情報収集する）

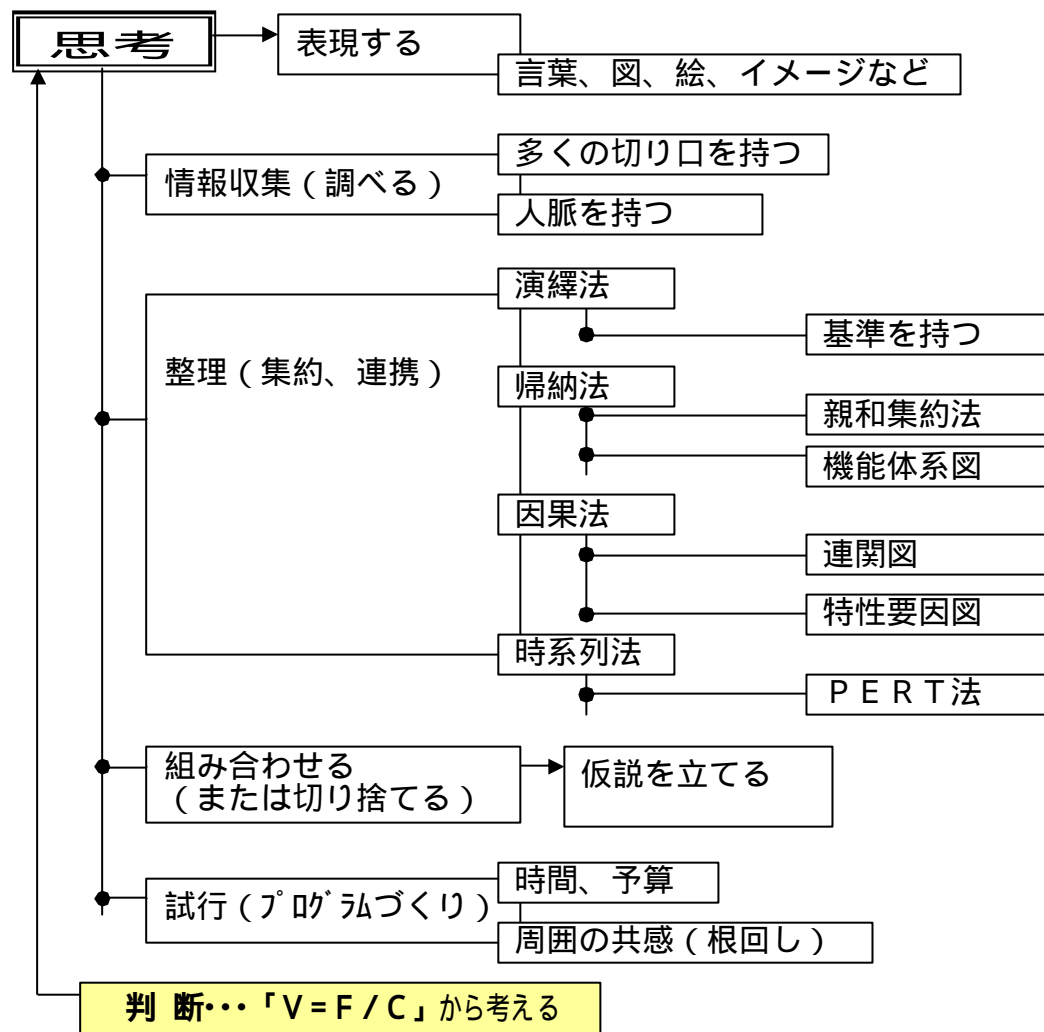
論理的思考の良否は情報の質によって左右される。料理の良し悪しは材料6割、腕前4割といわれるように、思考の材料である「情報をいかに集め、いかに整理するか」は重要な作業である。

2) 複雑なものを簡単にするために思考や情報を「整理する」

情報を集めたら、一つ一つの事象にとらわれず、根本的な原因や本質をつかむことが重要である。目的に応じて親和集約法や機能体系図などを用いて情報を整理する。

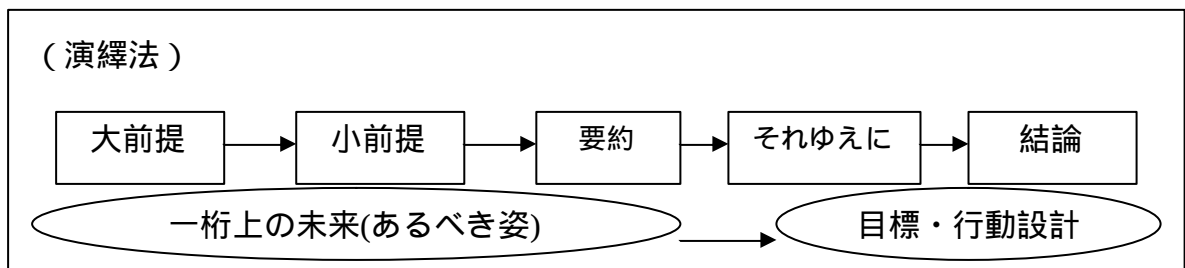
2. 思考を整理する技法の効果的な使い方

ある程度、アイディア発想や思考の形成（詳細は第1回フレームチャートの技術（協働通信No.27号）参照）ができると、それをまとめる段階に入る。整理するための代表的な技法には、演繹法、帰納法、因果法、時系列法の4つがある。目的に応じて柔軟な使い分けが大切である。

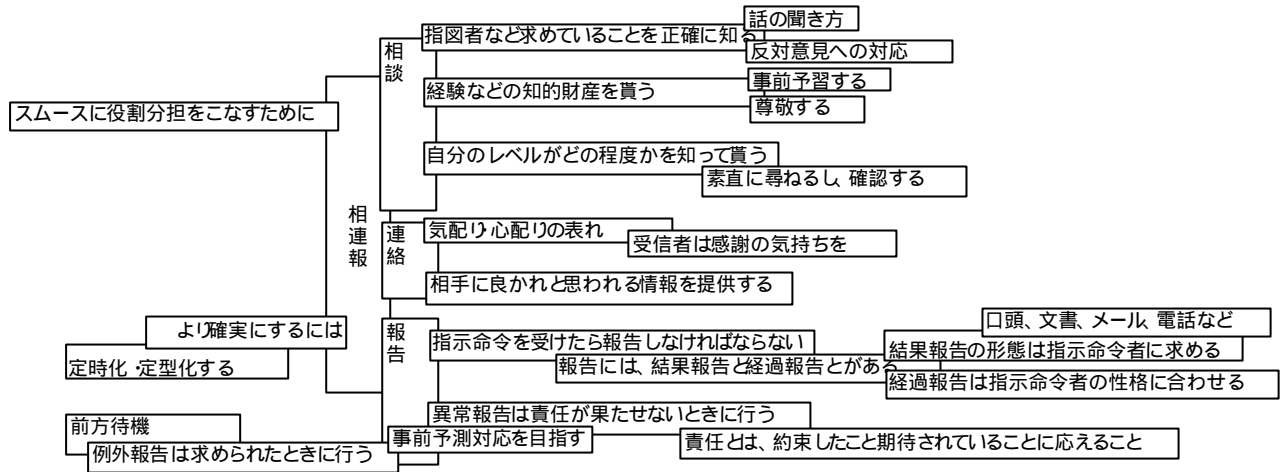


1)「演繹法」で理想からプロセスを描く

演繹法は、原則から特定の事実を推し量るものである。大前提→小前提→結論というロジックが演繹法の基本といえる。典型的な事例は図書分類である。また、自分達が目指すゴール(理想、目的)を描き、それを実現するためにどうするかを逆算して考える方法として使うことが出来る。演繹法の効果的な使い方は、目的からプロセスを考えるとときであるが、通常自分達が考えるよりも「一桁上」の未来から発想して今の行動を設計することがポイントである。



<仕事の出来る人は相連報が上手い>



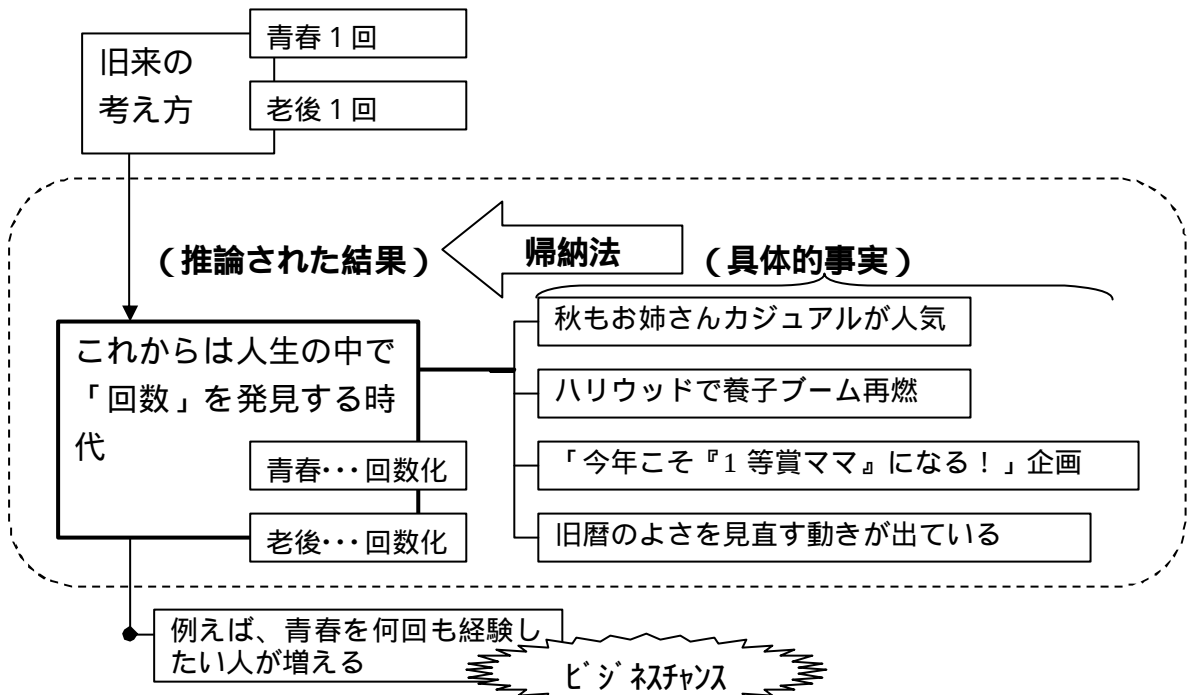
演繹法でフレームチャートを書こうとするときは、「考える基準」を持つことが大切である。これについては次号で詳しく解説したいと思う。

2)「帰納法」でビジネスチャンスを見つける

帰納法は、具体的事実から原則を導き出すものである。現状を調査分析し、類似する情報を集め、そこから積み上げて理想あるいは結論を導き出す方法といえる。親和集約法などがこれに該当する。

先がよく見えない問題解決や斬新な発想が求められるとき、成功のルールを発見したいときは、帰納法が有効である。いかに相手が納得するロジックであるかがポイントになる。

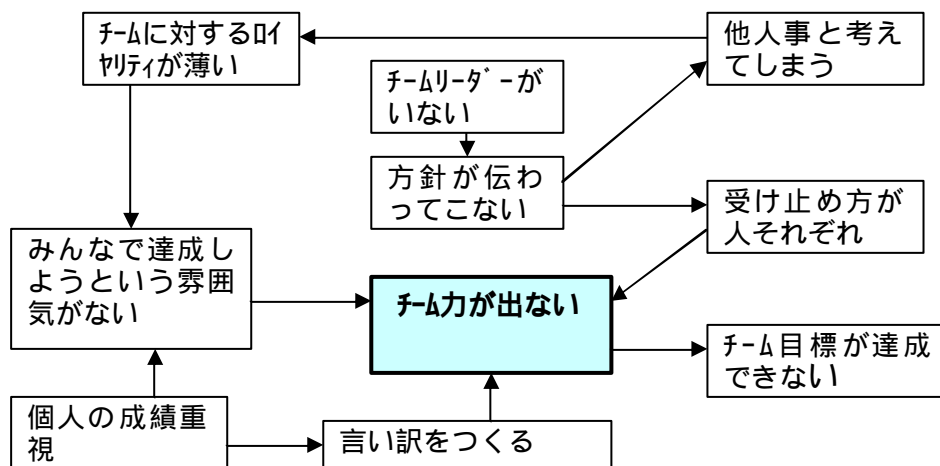
<新聞・雑誌情報からビジネスチャンスを探る>



3)「因果法」で筋道を考察する

問題解決あるいは考案するために、関連する問題点を因果関係で整理する図法である。代表的な手法に連関図、特性要因図等がある。事実関係を下图のような連関図で整理、分析し、その結果から結論を導く筋道を考察していく。

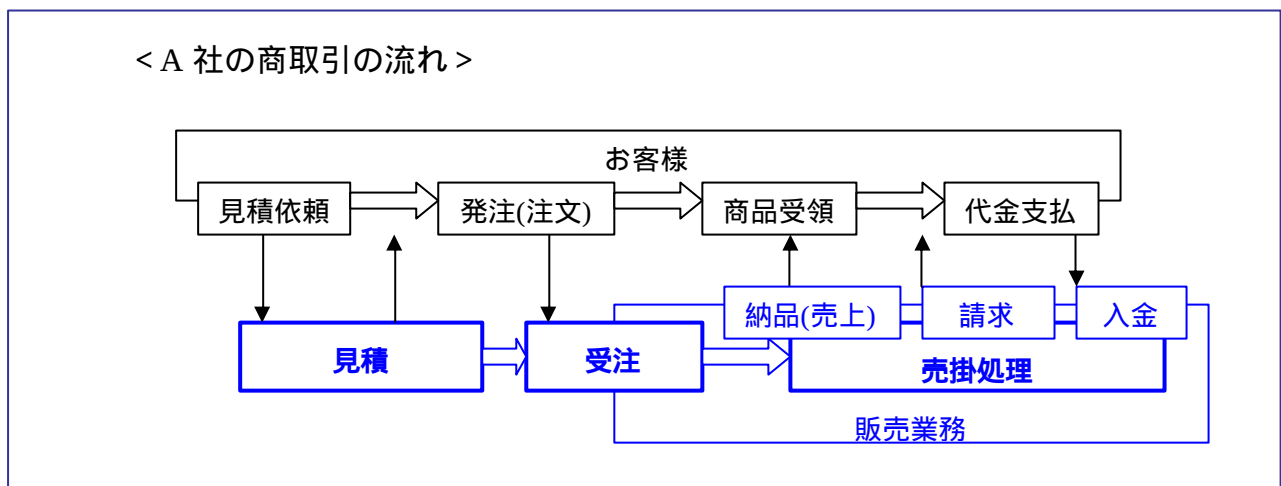
<なぜチーム力が出ないのか>



4) 「時系列法」で構造や手順を明確にする

時間の流れにそって整理する。代表的な手法は、機能関連図 PART、ガントチャート等がある。

事務工程分析やシステムの仕様書を書く前段階に、機能関連図のようなチャートを書くことで機能の構造や手順が明確になる。業務マニュアルの作成や改善・設計の整理手段に使うと有効である。



BSO のフレームチャートシリーズ (次号の予告)

次号の BSO のフレームチャートは、「考える基準」を中心に解説していきます。